

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 3月31日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720110

研究課題名（和文） 20世紀初頭ロシアにおける〈新しい人間〉の創造と演劇

研究課題名（英文） The Creation of the <New Man> and Theater in Early Twentieth Century Russia.

研究代表者

佐藤 正則（SATO MASANORI）

九州大学・大学院言語文化研究院・准教授

研究者番号：10346843

研究成果の概要（和文）：

20世紀初頭ロシアのさまざまな思想潮流における〈新しい人間〉を創造する手段としての演劇の理論を研究し、それぞれの潮流における演劇理論と人間観および世界観との相互関係を分析した。また20世紀初頭ロシア思想・文化史の新たな枠組みを構築することを目的として、さまざまな潮流の間でおこなわれた演劇をめぐる論争を検証し、それらを〈新しい人間〉の創造をめぐる論争として再解釈した。

研究成果の概要（英文）：

In this study we investigated the theories of theater as a means to create the <New Man> in various groups of intellectuals in early twentieth century Russia and analyzed the relation between the theory of theater and the view of human nature and worldview in each group. For the purpose of constructing a new framework of intellectual and cultural history of early twentieth century Russia, we also examined controversies related to theater among the groups and interpreted them as controversies over the creation of the <New Man>.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：ロシア思想・文化史

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：外国文学、ロシア、文化、思想史、演劇

1. 研究開始当初の背景

20世紀初頭ロシア思想・文化史の従来の図式はソ連邦の消滅とともに妥当性を失い、新たな枠組みの構築が待望されているが、国内

外いずれにおいてもいまだ実現していない。現在の内外での研究の多くは、個別の思想家の再評価という段階にとどまっており、抽象的認識哲学への偏重が見られ、依然として旧来の説明図式や分類範疇がもちいられてい

る。また思想史研究と文化・芸術史研究とが乖離している。

本研究申請者佐藤正則は、平成10-12年度科学研究費補助金研究において、〈新しい人間〉という視点からボリシェヴィズムを研究した。さらに、平成15-17年度および平成18-20年度科学研究費補助金研究において、〈新たな世界観〉の模索・〈新しい人間〉の創造という新たな観点から、20世紀初頭ロシア思想・文化史の再構築を試みてきた。その過程で、この視角の有効性は立証されたが、同時に、新たな枠組にもとづいた20世紀初頭ロシア思想・文化史の構築を完成させるためには、〈新しい人間〉の創造手段として多くの潮流から着目され、それゆえとりわけ重要な位置を占める演劇の理論と実践に絞って、さらに詳細な実証研究が必要であるとの認識にいたった。

2. 研究の目的

本研究の目的は 新たな視角（〈新しい世界観〉の探求、〈新しい人間〉の創造）から20世紀初頭ロシア思想・文化史の新たな枠組みを構築する作業の一環として、〈新しい人間〉の創造手段という観点から、1900年代初頭から1920年代初頭にかけてのロシアの諸思想・芸術潮流の演劇にかんする理論と実践とを検討することにあつた。

具体的には以下の3点である。

(1) 1900-1910年代のロシア諸潮流における〈新しい人間〉創造の理念と演劇理論

諸潮流において、〈新しい人間〉創造の手段としてなぜ演劇が注目されたのか、また各潮流においてどのような演劇理論が形成されたのかを検討する。〈新しい人間〉の理論と演劇理論との相互関連に注目する。

(2) 〈新しい人間〉創造の試みとしての演劇実践と論争

諸潮流における演劇の実践活動を〈新しい人間〉創造の観点から検討するとともに、演劇をめぐる諸潮流の間での論争をとりあげ、論争の論点と対立点、論争の構図、また共通性を明らかにする。

(3) 新たな思想・文化史の構築、1920年代初頭ロシアの演劇、1930年代ソ連文化への展望

上述の(1)(2)をふまえ、演劇の理論と実践の検討により明らかになった知見を、1900-1910年代ロシア文化・思想史の新たな枠組へと組み込み、〈新しい人間〉創造の理念とその実現手段をめぐる論争という視角から20世紀初頭ロシア思想・文化史の記述を試みる。さらに1920-30年代のソ連期文化にたいする新たな視座を展望する。

3. 研究の方法

(1) 研究の具体的内容

本研究は大きく3つの段階に分けておこなわれた。下記の①は2009年度、②は2010年度、③は2011年度におおむね該当する。

①1900-1910年代のロシア諸潮流における〈新しい人間〉創造の理念と演劇理論

この時期のロシアの諸思想・芸術潮流が、立場の違いを超えて総じて、〈新しい人間〉創造を唱え、その手段として演劇に強い関心を抱いたことに着目し、それぞれの潮流における〈新しい人間〉観と演劇理論とを関連づけて検討した。

対象とした潮流は、前期・後期象徴主義、エヴレイノフ、マルクス主義とリアリズム、初期の未来派であった。具体的に検討したのは以下の点であった。1.それぞれの思想潮流における人間観と〈新しい人間〉のイメージ、背後の世界観、2.新しい人間創造の理念が演劇理論にどのように表れているか。

②〈新しい人間〉創造の試みとしての演劇

実践と論争

上記①の成果を受け、諸潮流間における演劇の実践活動を跡づけ、〈新しい人間〉創造実験の実態を明らかにし、さらに諸潮流間での〈新しい人間〉と演劇をめぐる相互交流と論争の展開を具体的に追跡し、論争の論点と構図を明確にすることを試みた。

③新たな思想・文化史の構築、1920年代初頭ロシアの演劇、1930年代ソ連文化への展望

上記①②の成果を受け、演劇の理論と実践の検討により明らかになった知見を、1900—1910年代ロシア文化・思想史の新たな枠組みへと組み込み、近代を超克する〈新たな世界観〉とそれを体現する〈新しい人間〉の創造の理念とその実現手段をめぐる論争という視角から、20世紀初頭ロシア思想・文化史の再構築・記述を試みた。

さらに、1918年から1920年代初頭におけるプロレタリア演劇の理念と活動に目を向け、1920—30年代のソ連期文化について展望し、20世紀初頭から1930年代までを包括的に把握できる視座について考察した。

(2) 研究の手法と視角

本研究は、20世紀初頭ロシア思想・文化関係の広範な資料を必要とした。資料の収集にあたって、当時の思想・文化・芸術関係の雑誌のマイクロ資料を購入し、20世紀ロシア文化・文学関係の原典資料の豊富な早稲田大学・東京大学図書館での資料収集をおこなった。

また、研究の遂行にあたっては、以下の3つの視点を導入した。

①思想史と芸術史との連関

演劇に着目することにより、狭義の思想史研究にとどまらず、思想史研究と芸術・文化史研究との架橋を試みた。

②〈新しい人間〉創造の手段としての演劇

演劇をたんなる芸術の一形式としてではなく、〈新しい人間〉創造の手段ととらえ、演劇理論・活動に知識人たちの人間観の表れを見てとろうとした。

③諸思想・芸術流派を関連づける新たな視点

(〈新しい人間〉の創造)

〈新しい人間〉創造という視点を導入することで、これまで別個に研究されてきた諸潮流(象徴主義・アヴァンギャルド・プロレタリア芸術)を関連させて検討した。

4. 研究成果

(1) 1900—1910年代のロシア諸潮流における〈新しい人間〉創造の理念と演劇理論

立場の異なるさまざまな潮流において共通して、演劇が〈新しい人間〉創造の手段とみなされていること、またそれぞれの潮流における演劇理論と背後の〈新しい人間〉観、世界観との関係が明らかになった。

とりわけ以下の2つについて、その演劇理論と世界観・哲学との関連が明瞭なものとなった。①後期象徴主義とくにイヴァノフとチュルコフ、②マルクス主義とくにルナチャルスキー。

この両者はいずれもこれまで、演劇をきわめて重要視していたことが知られながらも、演劇理論と哲学・世界観との関係が解明されないままであったものである。

①後期象徴主義とくにイヴァノフとチュルコフ

後期象徴主義者の中で演劇を〈新しい人間〉創造の手段とみなす考えをとりわけ強くうちだしたイヴァノフとチュルコフの世界観について、従来の学説(後期象徴主義者は形而上学的本質のみを〈実在性〉みなしたと主張する)とは異なる新たな解釈を提示した。後期象徴主義者たちが形而上学的本質のみならず現象世界にも〈実在性〉を回復さ

せようとしていたことを明らかにした（論文：佐藤正則「イヴァノフとチュルコフにおける〈実在性〉概念の二面性」、論文：佐藤正則「ゲオルギー・チュルコフの〈神秘的アナキズム〉」）。両者において、形而上学的本質世界の直観的・神秘的把握による自己確立の理念と、祝祭的演劇による新しい共同体創造の理念とが、チュルコフにおいてどのようにして包摂・統合されているのかを検証した。

②マルクス主義とくにルナチャルスキー

ルナチャルスキーはマルクス主義者の中で最も早くから演劇に関心をよせ、象徴主義や未来派の演劇の批評を積極的におこない、1917年以降はプロレタリア演劇運動を推進した。そうした演劇への関心が、生物エネルギー論に依拠した彼の美学理論と有機的に結合したものであることを明らかにした（学会発表：佐藤正則「1900-1919年におけるルナチャルスキーの美学理論と演劇批評」）。

(2) <新しい人間>創造の試みとしての演劇実践と論争

さまざまな潮流の間の演劇理論・実践の比較、また演劇をめぐる諸潮流間の論争を〈新しい人間〉創造手段としての新しい演劇のありかたをめぐる論争という視角から跡づけることによって、相互の共通性と相違点が明確になった。とりわけ以下の2つの論争の論点と構図が明確なものとなった。①<神秘的無政府主義>をめぐる象徴主義の内部での論争、②後期象徴主義とマルクス主義との演劇理論をめぐる知的交流と論争。

①<神秘的無政府主義>をめぐる象徴主義の内部での論争

象徴主義運動内での世代間対立とみなす通説に疑義を呈し、〈実在性〉概念、世界と

人間との関係、それを体現した演劇理論をめぐる論争としてとらえなおした。

②後期象徴主義とマルクス主義との演劇理論をめぐる知的交流と論争

とりわけ後期象徴主義とマルクス主義の演劇理論の間に、世界観の相違にもかかわらず、いくつかの共通性が存在していることを明らかにした。共通性としては、演劇が個人主義の克服と新たな共同体の実現にとって有効とされている点、役者と観衆との乖離を克服した集団創造、祝祭劇が理想化されている点などがあげられる。

これらの研究成果については、現在論考を準備中である。

(3) 新たな思想・文化史の構築、1920年代初頭ロシアの演劇、1930年代ソ連文化への展望

演劇の理論と演劇をめぐる論争の検討により明らかになった知見を、1900-1910年代ロシア文化・思想史の新たな枠組みへと組み込み、近代を超越する〈新たな世界観〉とそれを体現する〈新しい人間〉の創造を再構築することを試みた

共著書：松井康浩編『20世紀ロシア史と日露関係の展望』では、第1章佐藤正則「20世紀初頭ロシア思想の新たな見かた」を分担執筆し、20世紀初頭ロシア思想を、唯物論・革命思想から観念論・宗教思想への転換とする既存の通説を覆し、近代的な主客二元論と近代的個人主義を克服する〈新たな実在論〉の探求としてとらえなおした。

さらに、共著書：小松久男・塩川伸明・沼野充義編『ユーラシア世界 越境と変容の場 第3巻 記憶とユートピア』では、第2章佐藤正則「革命と哲学」を分担執筆し、マルクス主義者を3つのグループに分け、それらの間での世界観をめぐる論争を跡づけ、「認識

理論」「歴史の必然性と人間の自由」「価値と倫理」という3つの論点を抽出するとともに、思考様式の共通性を明るみにした。これらの論争点は人間の精神性や文化運動、とりわけ演劇の問題と深く関連している。

この<新しい人間>の創造をめぐる論争という視座からの20世紀初頭ロシア思想史の再構築については、より体系的な著作をめざして今後も作業を継続する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

佐藤正則「イヴァノフとチュルコフにおける〈実在性〉概念の二面性」『ロシア史研究』、ロシア史研究会、第85号、2009年、3-19頁、査読有り。

佐藤正則「ゲオルギー・チュルコフの〈神秘的アナーキズム〉」『言語文化論究』、九州大学大学院言語文化研究院、第28号、2012年、171-184頁、査読有り。

[学会発表] (計1件)

佐藤正則「1900-1019年におけるルナチャルスキーの美学理論と演劇批評」日本ロシア文学会2012年西日本支部会、2012年6月16日、北九州大学(予定)。

[図書] (計2件)

松井康浩編『20世紀ロシア史と日露関係の展望』九州大学出版会、2010年。第1章佐藤正則「20世紀初頭ロシア思想の新たな見かた：知的転換と知識人との論争をめぐって」(13-57頁)を分担執筆。

塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界：繰り返される越境と変容 第3巻 記憶とユートピア』東京大学出版会、2012年。第2章佐藤正則「革命と哲学：世紀転換期ロシアにおけるマルクス主義者たちの哲学的模索と論争」(51-76頁)を分担執筆。

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 正則 (SATO MASANORI)

九州大学・大学院言語文化研究院・准教授

研究者番号：10346843

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：